12

CIS（独立国家共同体）経済

過剰流動性がすべてのネックに

国際経済

旧ソ連では八〇年代後半に経済危機が深刻化した。特に、①成長率のマイナス転化（八九年末から）②放漫財政、企業へのソフトな信用政策（補助金の増大、債務の帳消し）、利潤分配・賃金決定面での企業に対する統制緩和などによる過剰流動性の進展③石油価格の下落などによる対外債務の急増――の三点が問題となった。

九一年には二つの点で新たな局面が生じた。第一に、一月に工業卸売価格と農産物買い付け価格、四月に小売価格の改定が行われ、同時に、価格のなし崩し的自由化が進み始めた。これまで、固定価格のもと、行列やモノ不足という形で隠されていたインフレが顕在化し始め、九一年の価格水準は、前年のほぼ二倍になった。

第二に、経済政策の主役として、連邦に代わって共和国が登場してきた。九一年の予算編成をみると、共和国が事実上、ほぼ完全な裁量権を得るに至っており、共和国と連邦との逆転関係は、八月のクーデター失敗で決定的となり、一二月の連邦の消滅で最終的に確定していたのであるが、すでに一月から始まっていたといえる。

こうした新しい局面にもかかわらず、九一年に経済状況はさらに悪化した。主要経済指標の減少幅は大きく拡大した。その要因としては、連邦機関による生産財配分制度の機能不全、共和国間・地域間取引のマヒ、輸入の大幅削減などがある。輸入削減は、対外債務返済を最優先課題としたことの結果であり、九一年の輸入は前年比四四％、特に旧コメコン諸国からの輸入は、六二・五％減少した。

過剰流動性についても改善はみられなかった。第一に、九一年末の現金通貨量は二六三四億ルーブルで、九〇年末比一・九倍に達した。また年間の現金通貨発行量は一二七三億ルーブル、前年の四・八倍に膨れ上がった。ここでインフレが初めて顕在化し、それに応じて過剰流動性も従来とはかけ離れた値を示すようになった。

第二に、九一年にも国民の現金収入が現金支出を上回って増え、預金や手持ち現金が著増した。特に、預金の増加が著しいが、これには四月の小売価格改定に伴って実施された預金に対する補償措置が影響しており、預金補償総額は一六二〇億ルーブルに達した（ただし、このうちの約四分の一〈五〇〇ルーブル以下の小口預金に対する補償額〉は三ヵ月間、残りは三年間凍結）。

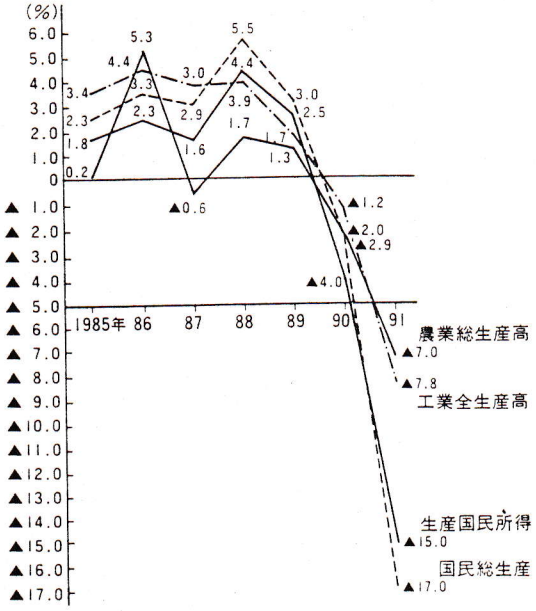
第三に、国内債務が九一年末に一兆五〇〇億ルーブルに達した。その主要因の一つである財政赤字は、全体で二〇〇〇億～二四〇〇億ルーブル、連邦予算だけで一五〇〇億ルーブルに達したと発表されている。さらに、ロシア共和国を中心に行われた巨額の債務帳消し（上半期だけで六〇〇億ルーブルを超えた）と既述の預金補償が国内債務増大に寄与した。対外債務も九一年半ばの時点で六五〇億ドルに達し、周知のように、その後断続的に返済繰り延べ交渉が行われるという事態に至っている。

緩い財政の蛇口

九二年には、連邦の消滅により経済政策の責任が共和国にあるという点が明確化し、また、すべての共和国でいよいよ価格の「自由化」が行われるということになってきたが、九一年以降のロシア共和国の政策などをみる限り、財政の「蛇口の緩さ」は変わっておらず、九二年にも過剰流動性の問題が依然としてあらゆる経済問題のネックであり続けると思われる。

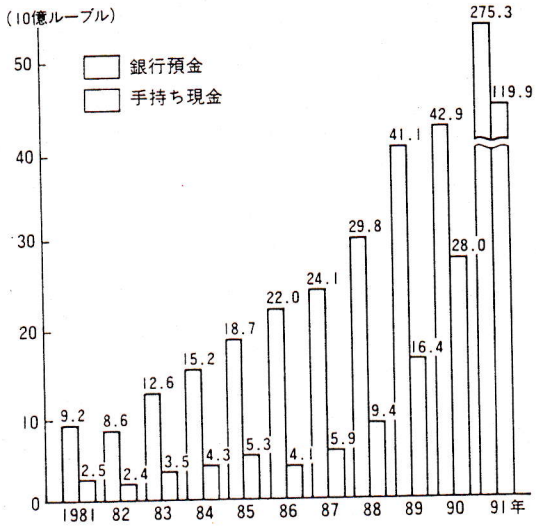
（北海道大学助教授　田畑　伸一郎）

12－1図　旧ソ連の主要経済指標増加率



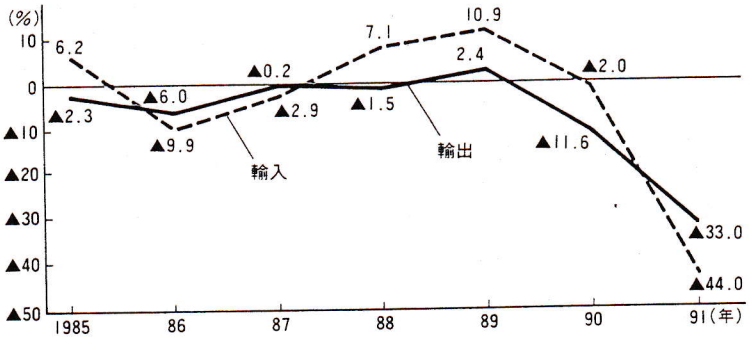
（注）1991年はＣＩＳのデータ
（出所）ソ連国家統計委員会『ソ連国民経済統計年鑑』1990
『経済と生活』1992（No.6）

12－3図　国民の貯蓄の年間増加額



（出所）ソ連国家統計委員会『ソ連国民経済統計年鑑』各年版
PlanEcon Report, 1990
『経済と生活』1992 (No.6)

12－2図　旧ソ連の輸出入名目増加率（対前年比）



（注）1991年はＣＩＳのデータ
（出所）ソ連国家統計委員会『ソ連国民経済統計年鑑』各年版、『経済と生活』1992(No.6)

12－1表　旧ソ連の国内債務の増加と財政赤字

（単位：10億ルーブル）

	1986年	87	88	89	90	91
国内債務増加	23.7	63.5	102.0	96.1	189.5	422.3
財政赤字	45.5	52.5	80.6	80.7	41.4	200～240

（注）農産物価格差補塡向け銀行貸し付けを含む広義の国内債務
（出所）ソ連国家統計委員会『ソ連国民経済統計年鑑』1990、『イズベスチヤ』1992.1.23、『経済と生活』1991(No.34、No.38)、1992(No.6)